

文化をめぐる闘争：白衣の場合

権, 錫永
北海道大学

<https://doi.org/10.15017/2202938>

出版情報：韓国研究センター年報. 8, pp.63-63, 2008-03-28. Research Center for Korean Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



文化をめぐる闘争 — 白衣の場合

北海道大学 権 錫 永

白衣に関する研究は、白衣文化の起源およびその意味するところを探ろうとする解釈学的な、文化論的な研究がほとんどであった。本研究では、近代における白衣についての語りの質、政治性を明らかにし、植民地の文化をめぐる闘争の一例として提示する。

白衣をめぐる日本人のまなざしは独特な欲望を含んでいた。白衣からは優雅な印象を受けることもあったが、日本人の認識はそこにとどまろうとはしなかった。彼らの認識への欲望は、白衣の裏の身体の汚れと蚤を追い求めたり、服装と不釣り合いな「豚小屋」のような住居を追い求めたり、または、白衣それ自体から朝鮮人の怠惰で柔弱な民族性を見いだした。彼ら日本人にとって白衣は、そういった朝鮮人の民族性や滑稽で不釣り合いな朝鮮社会を見いだす回路であった。

白衣が常服になった理由について、日本人の間では喪服起源説が有力だった。そこで、朝鮮人はしばしば、喪服を常服として使用する「めでたくない国民」とののしられた。1920年代頃までのこういった口汚い罵倒の中にあつて、1920年代の柳宗悦の洗練された朝鮮論は新しく、洗練されたものだった。柳は、朝鮮の(曲)線の美=悲哀の美を発見し、「愛に飢える心のシンボル」だとした。柳にとって朝鮮人は悲運の子供のようであり、悲しみに満ちた、愛を訴える女性のようなものであった。彼は白衣を通して同じ結論を導き出す。苦難に満ちた生活の中で、楽しさを持たない朝鮮人は色を離れ、常に喪に服している、と。こうして白衣は朝鮮人の苦しみと悲しみの表象とされたが、そこには柳の操作があつた。柳は朝鮮の至る所に曲線が見られるとしたが、村山智順はほぼ同じ頃、朝鮮の服は直線形だとしており、柳も様々な曲線の例を挙げながら服については言及していない。要するに、柳は朝鮮の服を曲線形とは認めることができず、そこで服に関しては線の代わりに色を取り上げることで、同じ結論を導き出してしまったのではないか。

こういった日本人の語りは政治性を色濃く帯びたものだが、それが朝鮮人自身の文化解釈を生んだことも明らかである。柳の朝鮮論は「朝鮮の美」を発見してくれたものであつたため、受け入れられやすいものであつた。しかし朝鮮人は「朝鮮の美」という観念自体は受け入れながら、線についても白についても、そのまま受け入れようとはしなかった。1930年代に崔南善は、白は宗教的な価値を持つ「神聖色」であるとした。これを皮切りに、独立後は「不滅の色」(金達寿)、「神の子孫であることを証明するもの」(金両基)、朝鮮民族が不滅であることを意味するもの(徐ジョンジュ)等々、滑稽なまでに過剰に解釈され続けている。

日本人の朝鮮文化解釈が勝手気ままな「密猟」だとすれば、朝鮮人自身のそれも密猟である。また、いずれも政治性を帯びたもので、一種の文化をめぐる闘争である。もはや日本人の誰も白衣について語るなくなった今、韓国人・朝鮮人の闘争はかつての支配者の亡霊を相手に、または<文字の亡霊>を振り払うべく継続しているかのようである。